

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19H01316

研究課題名（和文）近現代中央アジアにおける水利と社会変動 定住民と遊牧民の相互関係を中心に

研究課題名（英文）Irrigation and Social Changes in Modern Central Asia: Focusing on the Reciprocal Relationships between Nomadic and Sedentary People

研究代表者

塩谷 哲史 (Shioya, Akifumi)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：30570197

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中央アジア最大のオアシス地域の一つであるホラズム地方を対象として、16-20世紀の比較的長期のスパンでの水利と社会変動との関わりを明らかにした。この時期の中央アジア南部オアシス地域は、16世紀のウズベク遊牧集団の征服と定住化、19-20世紀のロシア帝国の軍事征服とその後のロシア・ソ連による支配と社会主義的近代化により、たびたび社会変動に直面した。本研究は水資源をめぐる定住民と遊牧民との相互関係の変化、ロシア・ソ連両政府主導の灌漑開発の現地社会への影響、遊牧民の定住化や大規模灌漑事業の現地社会に与えた影響を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現在の中央アジア灌漑史研究は、ロシア・ソ連側の政策を解明しているが、現地社会からの視点が欠けている。また、最も人口稠密なフェルガナ地方や、歴史的な帝国建設の舞台またはイスラーム教学の中心であったマーワラーアンナフルにおける事例を、他の地域の灌漑史を叙述する際に代表させることが多い。さらに灌漑史研究は文献資料のみに依拠しがちで、民族誌学、人類学の成果を十分に参照していない。そこで本研究は、16世紀から20世紀に至る比較的長期のタイムスパンを対象とし、ホラズム・オアシスに焦点を当て、文献史料と口述資料の双方を用いて、現地社会の視点から記述することに努めた。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on the relationship between water use and social change over a relatively long span of the 16th-20th centuries in Khorazm, one of the largest oasis areas in Central Asia. During this period, Central Asia frequently faced social changes due to the conquest and settlement of the Uzbek nomadic groups from the 16th century, the military conquest and colonial rule of the Russian Empire in the 19th and the 20th centuries, and the subsequent socialist modernization initiated by the Soviet Union. This study examines the relations between the local settled and nomadic ethnic groups over water resources, the impact of the large irrigation projects led by both the Russian and Soviet governments on local society.

研究分野：中央ユーラシア史

キーワード：中央アジア 水利灌漑 在来知 歴史学 定住民と遊牧民の相互関係

1. 研究開始当初の背景

本研究は、中央アジア最大のオアシス地域の一つであるホラズム地方を対象として、16-20世紀の比較的長期のスパンでの水利と社会変動との関わりを明らかにする。この時期の中央アジアは、モンゴル、ティムール両帝国に代表される帝国建設の中心から、その周辺地域に成立した帝国（ロシア、清朝）の周縁に位置づけられていく過程にあったとされている（小松久男編『中央ユーラシア史』2001年）。とくに中央アジア南部定住オアシス地域は、16世紀のウズベク遊牧集団の征服とその後の長期間にわたる定住化、1860年代後半から本格化するロシア帝国の軍事征服とその後のロシア・ソ連による支配、ソ連期の社会主義的近代化にともなう開発により、たびたび社会変動に直面した。

これまで近世・近代の中央アジア史研究全般に関して、ロシア帝国の中央アジア軍事征服前後、およびロシア革命前後で研究の断絶があった。近年こうした断絶を、灌漑事業の展開に注目して乗り越えようとする著作が現れている。塩谷哲史（『中央アジア灌漑史序説』2014年）は、19-20世紀初頭のホラズム・オアシスのミクロな事例を取り上げて、ロシア帝国の軍事征服以前と以後の灌漑事業の特徴を明らかにした。またピーターソン（M. Peterson, *Technologies of Rule*, 2011）、オバートライス（Obertreis, *Imperial Desert Dreams*, 2017）は、ロシア帝国支配期（帝政期）とソ連期の中央アジアにおける灌漑開発計画の連続性を指摘した。しかしこれらの研究は、

1) より長いスパン、すなわち16世紀に歴史上この地域で最後の大規模な騎馬遊牧民集団の征服と定住化を起こしたウズベク遊牧集団の移動から、現在に至る時期を通観していない、

2) ソ連期に中央アジア南部で進展した綿花モノカルチャー化を過去に遡及させてとらえる傾向が強く、取り上げられる研究対象が綿花栽培地拡大を目指した大規模灌漑事業に限られ（飢餓草原の開発やタジク共和国におけるダム建設など）、小規模な土地改良事業や灌漑事業が扱われていない、

3) 史料的制約もあり、現地社会の水利のあり方とその変容という根本的な問題はほとんど検討されていない

という諸問題を抱えている。さらに、ソ連の過度な灌漑開発がもたらしたとされるアラル海問題に関心が集中しがちであるが、歴史的にはアラル海周辺地域やシル川中・下流域ではなく、アム川下流域（ホラズム地方）に人間社会が発達してきたのであり、そこで起きた社会変動、開発に注目せずに、ソ連期の灌漑開発が社会に与えた影響を理解することはできないはずである。

2. 研究の目的

本研究は、16-20世紀の中央アジアにおける水利と社会変動とのかかわり、とりわけ前近代中央アジア史の主要テーマでありながら、近代以降は十分に議論されてこなかった定住民と遊牧民の相互関係の変容、およびそれを軸とした現代に至るまでの現地社会の動態を明らかにする。

3. 研究の方法

考察のための史資料は、網羅的に収集・分析を重ねている現地語（テュルク語、ペルシア語、ロシア語）史料に加え、ソ連期の考古学民族誌学調査（1939年開始）によって収集された口述資料、および2018年度より開始している現地での聞き取り調査記録を用いる。

4. 研究成果

2019年度は、これまでの研究蓄積の公表と今後5年間の研究の展望の提示を心がけた。まず、2019年8月～12月にかけて複数回、ウズベキスタンのイチャン・カラ博物館、ロシアの科学アカデミー人類学研究所において、近代中央アジアにおける水利の実態に関する文書史料の調査を行った。ウズベキスタンではあわせて聞き取り調査も実施している。また、日本文化人類学会第53回研究大会（2019年6月）、2018年より理事を務めるヨーロッパ中央アジア学会（ESCAS）第16回大会（2019年6月）、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの冬季シンポジウム「Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopolitics」（2019年12月）にて、それぞれ学会報告を行った。これらの報告は、19～20世紀初頭に商業目的での人の移動がオアシス社会の水利に変化をもたらす断面を切り取ったものである。さらに、16～20世紀の間にロシアがインドへの通商路開拓を目指して展開したアム川のカスピ海への転流構想とその現地社会の水利への影響について、『転流』（風響社、2019年）を刊行した。本書ではこれまで体系的、長期スパンで論じられてこなかった同構想について、その構想の目的が時代によって変

化する、ないし多目的に変化していく過程を明らかにした。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の状況下において、現地調査を行うことが難しくなったため、国内所在史資料の収集・分析、成果公表に向けた準備に注力することにした。については、現在の中央アジア5か国の領域にあたる地域の水利史のみならず、新疆、モンゴル、中国北部、朝鮮半島北部に至る、ユーラシア草原地帯南辺に位置する諸地域の水利史関連の書籍を収集、分析している。これにより、定住民と遊牧民との関係が、これらの地域の水利利用のあり方にどのような影響を与えてきたかを把握できるようになった。また他のプロジェクト関連の調査と並行して、天理図書館などで関連史資料の収集を行った。成果の一部として、「ヒヴァ・ハン国史研究とフィールドでの史料調査」(『筑波大学地域研究』42、2021年3月)などを刊行したほか、事典項目として「南・中央・西アジアの砂漠 カラクム砂漠」「シルクロード」(日本沙漠学会編『沙漠学事典』丸善出版、2020年7月)を執筆した。については、非常勤研究員2名(Ovsiannikov Kostiantyn氏、Djalilova Nigora氏)を任用し、ロシア語、ウズベク語で収集された口述資料の整理、ならび各氏の専門(公共経済、エネルギー政策研究)の見地から、今後の調査方法について助言をいただいた。Djalilova Nigora氏は2021年3月Routledge社より、単著 *Sustainable Energy in Central Asia: Transition Towards Renewable Energy Sources in Uzbekistan* を刊行された。

2021年度は、16-20世紀の中央ユーラシア史、および近世・近代の水利史に関する研究文献の収集に努めた。また可能な範囲で、現地で刊行された地方史、回想録の網羅的収集を継続した。ただし、イチャン・カラ博物館と協力した聞き取り調査やウズベキスタン等での文書館調査については未実施に終わった。成果公表に関しては、ホラズム・オアシスの歴史に関して、和文1点(「19世紀中葉のヒヴァ=ロシア関係再考—シュクルッラー・アガのロシア、オスマン両帝国への派遣について—」)、英文1点("The Association between the Descendants of Sufi Saint Sayyid Ata and the Khans of Khiva at the Beginning of the 19th Century")の査読論文を刊行することができた。また編著に1917年トルキスタンの水利権法に関する論文1点(「改革と水利」)を掲載できた。また学会報告で関連するものは2件あったが、とりわけANGIS-JAPAN(アジア歴史地理情報学会)においては、中央アジアの水利の在来知に関する共同報告を行うことができた。アジア経済研究所の植田暁研究員と協力のもと、同研究所において中央アジアの灌漑史に関する基礎理論研究会立ち上げの準備を行った。同研究会は2022年4月にスタートし、国内外で中央アジアの水利灌漑史に関心を持つ研究者をつなぐネットワークとして機能することが期待できるとともに、現地調査および収集した文献の研究結果をいかに水利史全般の文脈に位置づけるか、または日本との比較からいかなる観点を生み出せるかについて議論を深めることができるだろう。

2022年度は、依然として新型コロナウイルス感染症拡大の影響から海外調査が難しい状況が続いていたため、国内の史資料調査と関連分野の研究者間の連携強化に努めた。前者については、東洋文庫、東京大学史料編纂所等で関連史資料の調査を行うとともに、中央アジアの水利史研究を、日本の近世・近代水利史研究の成果に照らして検討し、新たな研究視角を発掘する作業を行った。また後者に関しては、アジア経済研究所基礎理論研究会を舞台に、国内で中央アジア各地の水利史研究を行う研究者と意見交換を行った。こうした活動の成果の一部として、水利史、ホラズム地方史、史料研究に関連した以下の論文を刊行できた(Shioya, Akifumi, "Shiite Captive Release Negotiations in Khiva: A Nexus of Khivan-Iranian and Anglo-Russian Relations," *Acta Slavica Iaponica*, 43, pp.73-93; Shioya, Akifumi, "Islam and the Nomadic Political Tradition in the 19th-Century Khanate of Khiva," *Oriente Moderno*, 102, pp.68-87; 塩谷哲史「19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記」野田仁編『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 93-106頁; 塩谷哲史「ラクダと都市が支えた草原の移動—18~19世紀の中央アジアとロシア—」今村薫編『中央アジア牧畜社会—人・動物・交錯・移動—』京都大学学術出版会, 60-81頁)。

2023年度は、中央アジア地域を対象として長年研究を続けている、地田徹朗(歴史学)、久米正吾(考古学)、植田暁(歴史学)、宗野ふもと(文化人類学)の4名を共同研究者に迎え、今後の研究の発展が見通せるようになった。また、世界遺産都市ヒヴァの水利史に関する専論があるウズベキスタン共和国イチャン・カラ博物館のカーミルジャン・フダーイベルガノフ氏や、ウズベキスタンの水利に関する単著を刊行した同国科学アカデミー歴史学研究所のアドハム・アシーロフ氏と研究交流および指導助言を仰ぎ、個人の一次史料の読解やフィールドワークだけでは知りえない伝承や技術、研究史に関して、新たな知見を得ることができた。さらに本研究課題を基課題とする国際共同研究強化の研究計画も、円滑に遂行できた。国内においても、代表者は京都大学防災研究所において客員准教授を務めながら、中央アジアの灌漑史を研究する上での史資料についての情報と最新の知見を整理することができた。公刊された成果は、Akifumi Shioya, "Khiva: A Central Asian Islamic City in the 19th Century," Morteza Maleki and Yasuaki Tanago (eds.), *Urban Regeneration and Historic Center: Vision from Tabriz, a Silk Road City. Conference Paper of the 10th International Policy Forum on Urban Growth and Conservation in Euro-Asian*

Corridor August 2019, Tokyo: Archi Depo Corporation, pp.29-34 などである。これ以外にも、*Central Asian Survey* をはじめとする学術雑誌に論文等を投稿中である。

以上の研究を通じて、16-20 世紀の中央アジアにおける定住民と遊牧民の相互関係の変容、およびそれを軸とした現代に至るまでの現地社会の動態を明らかにしてきた。他方で、社会と水利の持続性を可能とした特定の社会層（ミーラップなどの水利行政に関わる人々）の存在に気づくことができた。今後は共同研究を通じて、彼らの出自や社会的地位および役割について検討を進め、本研究をさらに発展させていく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 Akifumi Shioya	4. 巻 43
2. 論文標題 Shi'ite Captive Release Negotiations in Khiva: A Nexus of Khivan-Iranian and Anglo-Russian Relations	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Acta Slavica Iaponica	6. 最初と最後の頁 73-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akifumi Shioya	4. 巻 102
2. 論文標題 Islam and the Nomadic Political Tradition in the 19th-Century Khanate of Khiva	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Oriente Moderno	6. 最初と最後の頁 68-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1163/22138617-12340280	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 0
2. 論文標題 19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 野田仁編『近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	6. 最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 0
2. 論文標題 ラクダと都市が支えた草原の移動 18～19世紀の中央アジアとロシア	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 今村薫編『中央アジア牧畜社会 人・動物・交錯・移動』京都大学学術出版会	6. 最初と最後の頁 60-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷 哲史	4. 巻 92
2. 論文標題 19世紀中葉のヒヴァ = ロシア関係再考 シュクルツラー・アガのロシア、オスマン両帝国への派遣について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 西南アジア研究	6. 最初と最後の頁 29-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akifumi Shioya	4. 巻 64(1-2)
2. 論文標題 The Association between the Descendants of Sufi Saint Sayyid Ata and the Khans of Khiva at the Beginning of the 19th Century	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Central Asiatic Journal	6. 最初と最後の頁 183-195
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.13173/centasiaj.64.1-2.0183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 0
2. 論文標題 改革と水利 トルキスタンの水利権法 (一九一七年) への道程	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 磯貝真澄、磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』(昭和堂、2022年)	6. 最初と最後の頁 139-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯貝真澄、塩谷哲史、磯貝健一	4. 巻 0
2. 論文標題 中央ユーラシアのムスリムとロシア帝国法 宗務行政と植民地行政	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 磯貝真澄、磯貝健一編『帝国ロシアとムスリムの法』(昭和堂、2022年)	6. 最初と最後の頁 15-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 42
2. 論文標題 ヒヴァ・ハン国史研究とフィールドでの史料調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 筑波大学地域研究	6. 最初と最後の頁 45-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 34
2. 論文標題 ニコライ1世期ロシア帝国のアジア外交 外務省アジア局および地方総督の役割を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Annual Report of The Murata Science Foundation	6. 最初と最後の頁 339-345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 -
2. 論文標題 トルクメンの遠征行	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 遊牧と定住化	6. 最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塩谷哲史	4. 巻 260
2. 論文標題 中央アジア古文書研究の可能性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史と地理 世界史の研究	6. 最初と最後の頁 55-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 6件）

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 ロシア帝国の中央アジア進出とヒヴァ・ハン国との「条約」（1843年）
3. 学会等名 ロシア東欧研究所オンライン研究会「ヨーロッパのアジア進出における外交と条約」
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 1840年代ヒヴァ・ハン国の対露交渉 捕虜解放、通商、国境の諸問題をめぐって
3. 学会等名 2021年度東洋史研究会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akifumi Shioya, Akira Ueda, Tetsuro Chida, Fumoto Sono
2. 発表標題 Indigenous Knowledge of Water Management in Central Asia
3. 学会等名 ANGIS Tokyo 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 草原の交易とラクダの利用 19世紀中葉のロシアと中央アジア
3. 学会等名 第6回「中央アジア牧畜社会動態研究」研究大会/
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 19世紀中葉ロシア・ヒヴァ関係史 カザフ草原における境界画定をめぐって
3. 学会等名 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・客員研究員セミナー
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 アラル海流域における水利の在来知とアム川転流計画の影響
3. 学会等名 公益財団法人鹿島学術振興財団第43回研究発表会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 19世紀ヒヴァ・ハン国の年代記
3. 学会等名 近代中央ユーラシアにおける歴史叙述と過去の参照第1回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 塩谷哲史
2. 発表標題 カザフ草原北辺部における長距離交易と家畜の取引
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIOYA Akifumi
2. 発表標題 Speculation or Commerce?: Alfalfa Export from Khiva to the Global Markets in the Beginning of the Twentieth Century
3. 学会等名 16th Biennial Conference of European Society for Central Asian Studies (ESCAS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIOYA Akifumi
2. 発表標題 Gift Giving between Khorazm and Iran in the Nineteenth Century
3. 学会等名 16th Biennial Conference of European Society for Central Asian Studies (ESCAS) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIOYA Akifumi
2. 発表標題 Khiva: An Islamic City on the Silk Road
3. 学会等名 10th International Policy Forum on Urban Growth and Conservation in Euro-Asian Corridor: Tabriz Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 SHIOYA Akifumi
2. 発表標題 Great Game and Abolitionism in Khiva: Anglo-Russian Rivalry in Nineteenth Century Central Asia
3. 学会等名 Slavic-Eurasian Research Center 2019 Winter International Symposium "Tsars' Regions between Literary Imaginations and Geopolitics" (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 塩谷哲史	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 60
3. 書名 転流 アム川をめぐる中央アジアとロシアの五〇〇年史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>TRIOS https://trios.tsukuba.ac.jp/researcher/0000003151</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	地田 徹朗 (Chida Tetsuro) (10612012)	名古屋外国語大学・世界共生学部・准教授 (33925)	
研究分担者	久米 正吾 (Kume Shogo) (30550777)	金沢大学・古代文明・文化資源学研究所・特任助教 (13301)	
研究分担者	植田 暁 (Ueda Akira) (30848859)	独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・新領域研究センター グローバル研究グループ・研究員 (82512)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宗野 ふもと (Sono Fumoto) (30780522)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・特任研究員 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ウズベキスタン	科学アカデミー歴史学研究所	国立イチャン・カラ博物館	